

談話のダイナミズムと方略転換プロセスの 相互関連性に関する研究

－からかい行為のコミュニケーション分析－

学位論文内容の要旨

1. 研究目的

本論は、ダイナミックな相互行為プロセスとしての談話と、その動的な流れに伴って変化する参加者の方略との相互関係について、日本語日常会話で実践されるからかい行為のコミュニケーション分析を基に明らかにするものである。

2. 背景

言語と使用者、さらにそれらを取り巻く言語外的世界の関わりを解明する語用論は、他分野からの影響と共にその裾野を広げてきた。語用論の礎を築いた 1960-70 年代の伝統的諸理論においては、統語論や真理条件的意味論からの脱却に重きが置かれ、検証に用いられるのは専ら実際の言語使用の場から切り離された文や発話、ごく短い対話などだったが、1980 年代の社会学的・文化人類学的視点の導入により、語用論や隣接する社会言語学の領域で自然会話へのアプローチが盛んに行われるようになった。本論が採用する談話分析 (DA) や、エスノメソドロジーの流れをくむ会話分析 (CA) は、そのような動向の中で急速に存在意義を高めてきた分析手法である。

本来、言語による会話とは複数の参加者が共在する状況下で進められるものであり、時系列的な流れを持った「談話」レベルでその実際を捉える必要がある。そのため、旧套の発話行為理論のようにある単独の発話や文にあらかじめ決定づけられた効力を付与することは適当ではなく、むしろやりとりの中でそれらの効力がどのように発揮され運用されていくのかを、連続的な観点から見る必要がある。また、従来の語用論的理論の枠組みでは、話者の発話に付随するパラ言語的な特徴、すなわち話者の表情や視線、声の調子、しぐさなどの意味づけが困難である。しかし、実際の話し言葉の談話からは、それらのパラ言語的な要素が相互行為の中で有機的に機能し、字義的な発話とは異なるレベルでメッセージを伝達したり、相手の反応に対して潜在的な影響力を及ぼしたりする様子が観察される。

これらの問題点を踏まえた上で、本研究は「遊びとしてのからかい行為 (playful teasing)」という会話現象を分析し、笑いや可笑しみ、親密さといった帰結に至るための相互交渉的な談話構築の試みと、そのダイナミックな過程の中で取られる様々な方略の究明を行う。

3. 研究内容

本論は、からかい行為のコミュニケーション分析を通じ、下記の目的の達成を図るものである。

- ① 伝統的な語用論の諸理論について、談話のダイナミズムを考慮に入れた上で再検討する。
- ② 談話分析の手法を応用することで、字義的な発話レベルのみならず、言外のレベルで履行される相互交渉の流れについても妥当性のある説明づけを行う。
- ③ ②により、会話の過程で実践される様々な方略について、相互行為の動的な方向性との関連から明らかにする。
- ④ 参加者間での談話共築のプロセスと対人関係の維持・管理との関連性について議論する。

4. 研究方法

本研究では、談話分析の手法によるビデオ録画調査を実施し、友人や親子など親しい間柄同士で構成される14グループの自然会話（各60分、計14時間）から86ヶ所のからかい発話を得た。その各例について前後関係を含む一定の長さのシークエンスを抽出し、発話内容やその他のパラ言語的手がかりを含めた詳細な書き起こしデータを作成した上で分析に臨んだ。

5. 結果と考察

第1章では、旧来の語用論的理論に対し、談話のダイナミズムという観点から問題提起を行った。また、言外のレベルで行われるコミュニケーションの議論に必要な道具立てであるフレーム、スキーマなどの抽象概念に言及した。第2章では、前章で取り上げた理論や概念に関する先行研究の内容を検証し、本研究との関連性について解説した。そこでの議論から、語用論の伝統的理論のみでは当該の相互行為を適切に説明づけることが困難であり、周辺領域（社会言語学、および社会学、文化人類学、認知心理学など言語学以外の諸分野）とのインターフェース上で折衷的な研究を行う必要性が示された。第3章では研究目的の達成に向けたリサーチクエストンを提示し、第4章では方法論と具体的な調査内容を紹介した。第5章および第6章ではデータの分析と考察を行い、からかい行為を先導する人物が自身の言語的・非言語的働きかけにより会話の方向性に影響を与え、さらに相手からの反応如何により動的に方略を変化させていくプロセスが顕在化した。このことにより、参加者個々人はやりとりの展開に対して必ずしも無策ではなく、むしろ能動的にコミュニケーションに携わっていることが明らかになった。また、そのような参加者相互的な談話構築の過程そのものが対人関係の維持・管理に直結する問題であることが、ラポールマネジメントの側面から論じられた。

6. 結論

自然会話へのアプローチの先駆けとなり、言語学の世界に多大な影響を与えてきた社会的・文化人類学的立場においては、事実として経験される相互行為が重視される傾向がある。そこでは、やりとりの展開はある発話への反応が実際に起こることで順次決定づけられていくものとされ、参加者個々人による方向づけの取り組みはほとんど評価されることがない。しかし、そのような観点は相互行為に携わる主体としての個人の裁量を過小視するものである。

本研究のデータが事実として明らかにしたように、からかい行為の先導者は自身の言動に対する解釈を相手に委ねる一方で、様々な言語的・非言語的手がかりを提示することにより、会話の方向性に

潜在的な影響力を及ぼす。そのような方略は相手の反応や周囲の状況により動的に変化し、それがダイナミックな談話構築のプロセスとなる。そのような言外のレベルで行われる参加者間の働きかけの実態は決して実証不能なものではなく、談話上に現れる種々のマーカ―を詳細に分析することで妥当な説明づけが可能になるものであり、本論はそのような試みを実践した画期的な研究である。この点において、本研究は自然会話の談話研究における理論的・方法論的枠組みに一定の成果をもたらすものである。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 伊 藤 直 哉
副 査 教 授 佐 藤 俊 一
副 査 教 授 柳 町 智 治

学位論文題名

談話のダイナミズムと方略転換プロセスの 相互関連性に関する研究

－からかい行為のコミュニケーション分析－

本論文は、談話を談話参加者のダイナミックな相互行為として捉え、談話進行のプロセスに従って変化する参加者の方略との関係において分析を施し、日本語における「からかい行為」のコミュニケーション分析を通して、先行研究において論じられてこなかった談話の側面を明らかにしようとする研究である。

いわゆる「語用論」と呼ばれる研究は、言語とその使用者、さらにそれらを取り巻く言語外的要因を解明しようとして深化を続けてきたが、本論文においては談話分析(DA)や会話分析(CA)の手法に基づきながらもそれに留まることなく、パラ言語的要素(話者の表情、視線、声の調子、しぐさ等)を取り入れながら、字義的な発話とは異なる相互行為としてからかい行為を取上げ、相互交渉的な談話構築のプロセスと、その方略をダイナミックなまま究明することに成功している。以上のような特徴を有している本研究において、以下、箇条書きでまとめられている質疑が審査委員から提起され、適切な応答がなされた。

1. 本研究において用いられた分析手法に関して

本論においては、既成の DA や CA の手法を超越し、フレーム、スキーマ等の認知科学的分析概念、またパラ言語的要素が取り入れられている。既成の手法を超越することにより、本論文が到達することが出来た新たな知見や談話の本性だけではなく、超越することによって失われた言語学的パラダイムも存在しているはずである。この両面を正しく評価しながら、研究の特色と得られた成果をまとめて欲しい。

2. 先行研究に関して

本論文の先行研究において、からかい行為の先行研究が独立して語られ、その到達

地点が明確にされることにより、本研究の特徴や独創的な知見が明確に浮き彫りになるものと思われる。先行研究のまとめ方にもう一つの工夫が欲しい。

3. からかい表現の発生を巡る談話構造に関して

本論文において、からかい行為は言語内行為として発生する旨、論旨が展開している。その基点として、パラ言語的なマーカーを設定しているが、パラ言語的なマーカーなしで発生するからかい行為の可能性も否定できないのではなかろうか。

4. からかい行為の6つのプロトタイプモデルに関して

本論文においては、からかい行為が6つのプロトタイプとして示されているが、談話参加者の共有知識として規定されたものか、また動的なプロセスとして描写されたものか、両者の境界が時に揺れ、結果として曖昧になっている印象がある。また、このモデルは、談話参加者にとって「強制」を促すモデルなのか、「参照」を求めるモデルなのか、モデルの性質的ステータスを巡る疑問も新たに発生してくるようと思われる。

5. からかい行為の成立認定に関して

本論文においては、からかい行為の成立が自明のものとして語られ過ぎているように思われる。からかい行為が成立したか否かに関する境界を明確にする考察が展開していても良かったのではないか。また、からかい行為の成功を認定する視点が、時に当事者、時に研究者の視点というように、少し揺れている部分が見受けられる。この揺れと同様に、CAの視点とDAの視点のどちらの分析者の立場に立つのか、やはり揺れている部分が存在しているようにも思われる。

審査員から以上のような質疑がなされたが、質問ごとに適切な応答がなされ、審査委員会からは了承がなされた。

本研究の特徴は、旧来のDAが対象としていた字義通りの談話レベルに対し、新たにメタレベルを設定し、からかいのフレームの成立をダイナミックな観点で提示し、方略と共にモデル化することに成功した点にあるものと思われる。この点は、既存のからかい行為の研究、DAの研究には見られなかった新たな視点を提示しているものと思われる。このような成果と同時に、メタレベルでのフレームの共有、からかい行為フレームの成立を、誰がどのように確定し、認定するのかという新たな疑問は発生しているものの、審査委員会はそのを上回る成果が達成できたものと判断し、本論文に対する総合的な評価を下した。

以上のような経緯を踏まえ、審査委員会内で慎重な議論を踏まえた結果、本論文の学問的独創性、仮説モデルの信頼性、汎用性、研究成果の社会的インパクト等を考慮し、北海道大学博士の学位に相応しい研究内容であると判断した。

よって本論文の著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。